

ると概ね下記のようになっている(()単位は $\mu\text{g/kg}$).

Sr : グラウンド(2299.7) > 園地(2118.1) > 砂場(1500.2)

Al : 園地(1054.31) $\approx$ 砂場(1048.3) > グラウンド(407.8)

Cu : 園地(243.7) > グラウンド(160.0) $\approx$ 砂場(156.8)

Mn : グラウンド(214.2) $\approx$ 園地(202.3) > 砂場(113.3)

Zn : 砂場(71.2) $\approx$ グラウンド(66.6) $\approx$ 園地(59.9)

Ni : グラウンド(46.3) $\approx$ 砂場(44.0) > 園地(37.8)

Sr は貝殻・サンゴ遺体等の海起源からの溶出性が高いことから、石灰岩の微細土粒子の混在などが推察される。また図7～図10にマップ表示しているが、車道沿いの用途別土壤ではMnやPbなどの高い地点が確認されることから、その供給源は車両排気ガスなどとの関連性が推察される。さらに、図11～図13には、硝酸性・アンモニア性窒素態の溶出性をまとめている。窒素態は水系の富栄養化汚染の指標となっている。やはり各土壤間やサンプル間での差異は大きいですが、いずれの窒素態においても園地での溶出量が高く、3窒素態の合量である全窒素(T-N)の平均溶出量は次のようになっている(()単位は $\mu\text{g/kg}$)。

T-N : 園地(45.4) > グラウンド(34.7) > 砂場(20.7)

今後、土地利用別土壤の種類を増やし有害元素成分

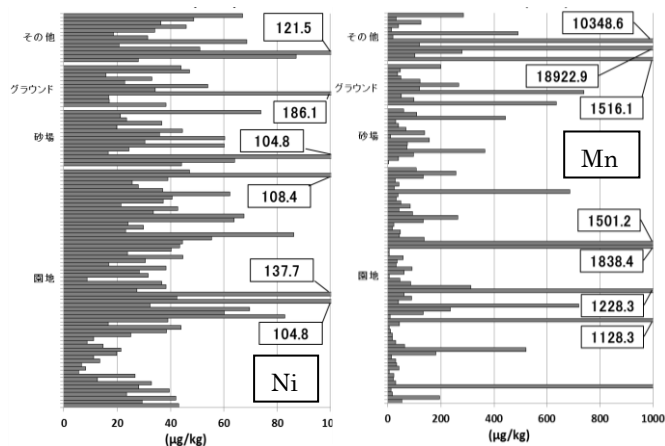


図2 Ni 溶出量($\mu\text{g/kg}$)

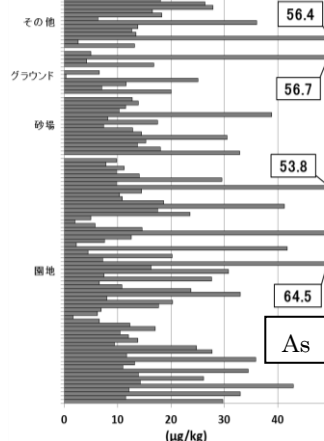


図4 As 溶出量($\mu\text{g/kg}$)

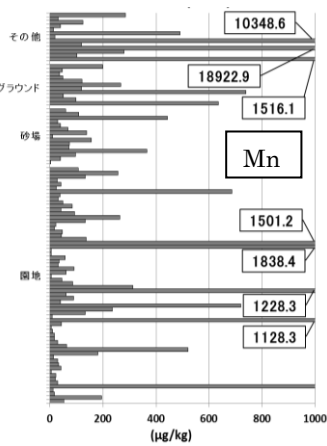


図3 Mn 溶出量($\mu\text{g/kg}$)

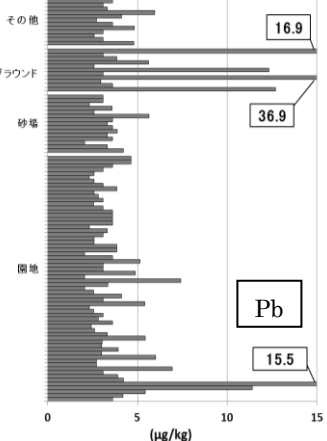


図5 Pb 溶出量($\mu\text{g/kg}$)

の供給源の解明を図ると共に、含有量との関係評価や、構成土粒子の分級効果等について考察する予定である。

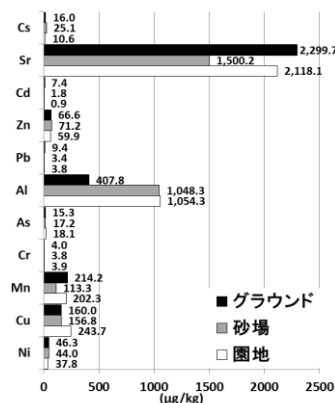


図6 各元素の平均溶出量($\mu\text{g/kg}$)

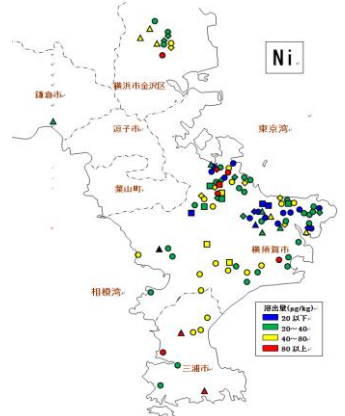


図7 Ni 溶出量地図

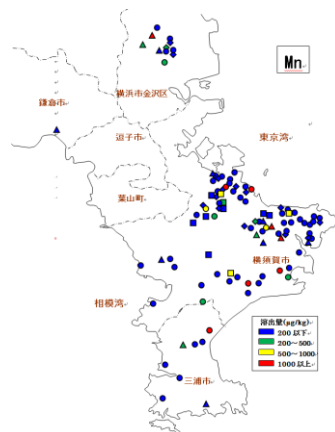


図8 Mn 溶出量地図

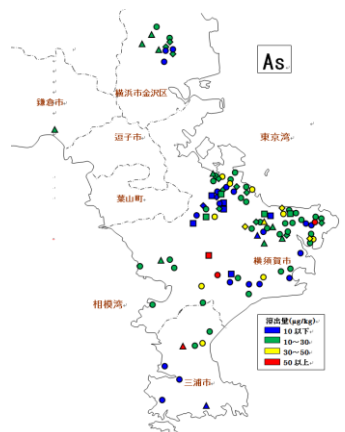


図9 As 溶出量地図

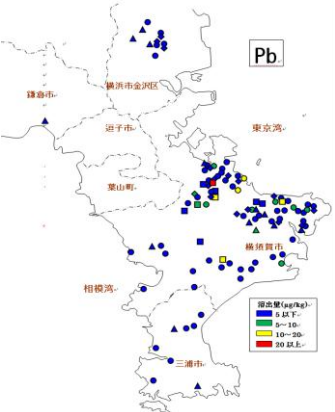


図10 Pb 溶出量地図

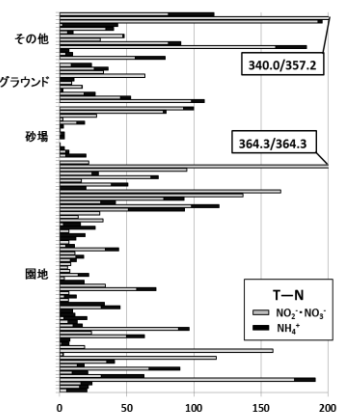


図11 T-N 溶存量($\mu\text{g/kg}$)

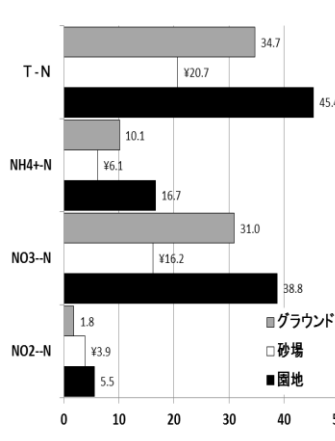


図12 各イオンの平均溶存量($\mu\text{g/kg}$)

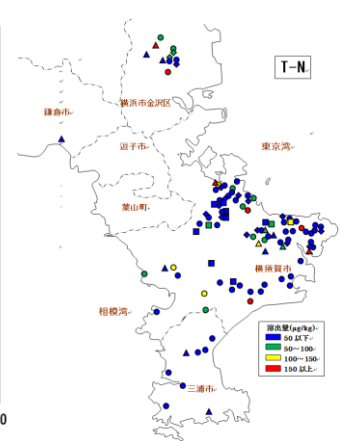


図13 T-N 溶存量地図